

## レファレンス

### コーナー

## 伝記から読む韓国の歴代大統領

### 二階宏之

韓国の歴代大統領は、初代の李承晩から第十七代の李明博まで一〇人が務めた。ここでは、四人の大統領に関する日本語資料を紹介する。

#### 李明博（第十七代大統領）

李明博は、一九四一年に大阪で生まれた。第二次大戦後、家族で韓国に帰国した後、牧場勤務の父、行商をする母の元で貧しい少年期を送った。高麗大学在学中の一九六四年に日韓会談反対デモを主導し、内乱扇動罪に問われ投獄された。大学卒業後、一九六五年に現代建設に入社し、現代建設を韓国のトップ企業に押し上げた。一九九二年に第十四代国会議員に当選し政界入りを果たした。二〇〇二年にはソウル特別市市長に当選し、二〇〇八年二月には第十七代大統領に就任した。

李明博は少年期から母の強い影響を受けて育った。李和釀著『すべては夜明け前から始まる―大韓民国CEO実用主義の大統領李明博の心の軌跡』（現文メディア）二〇〇八年）の中で、夜明け前から始まる母の祈りや知恵を通じて貧しくても現

実とぶつかる勇気を与えられたと紹介している。李明博著『李明博自伝』（新潮社 二〇〇八年）は、少年期の貧困生活から、現代グループでの経営者として活躍した姿を描いたものである。李明博著『都市伝説ソウル大改造』（マネジメント社 二〇〇七年）は、ソウル市長時代に多くの建設労働者や清溪川周辺の商人たちを説得し、清溪川復元を成功させた一〇〇〇日間の記録である。

鄭先燮著『大韓民国CEO（最高経営責任者）李明博』（マネジメント社 二〇〇八年）では、李明博のCEO精神について、実用主義と現実主義に基づき、市場主義こそが経済哲学であり、企業経営と国家経営は本質的に変わらないと述べている。

#### 朴正熙（第五〜九代大統領）

朴正熙は、一九一七年に慶尚北道の貧しい農家に生まれた。師範学校、満州軍官学校、日本陸軍士官学校で学び、終戦後には警備士官学校に入學した。一九六一年五月―六日の軍事クーデターで政権を掌握し、一九六三年に大統領に就任した。国家運営では経済発展を優先し、政権批判を封じるために民主主義を圧殺した。一九七九年一〇月二六日に側近の銃に倒れ、六二歳の生涯を閉じた。朴正熙の行動様式を決定づけたものとして、李祥雨著『朴正熙時代―その権力の内幕』（朝日新聞社 一九八八年）では、四つの要因を挙げてている。第一に幼少年期に体験し

た経済的な貧困、第二に青年期に影響を受けたと思われる日本の維新思想、第三に軍隊生活で経験した様々な挫折感、第四に権力志向である。朴正熙著『韓民族の進むべき道』、『国家・民族・私』（朴正熙選集①、②）（鹿島研究所出版会 一九七〇年）では、李承晩自由党の独裁二年の失策と張勉民主党政権に対する無能さに対する当時の心境と覚悟を述べ、五・一六軍事クーデターの歴史的正当性を主張している。

#### 金大中（第十五代大統領）

金大中は、一九二五年に全羅南道の荷衣島に四人兄弟の二男として生まれた。政治活動中に五度にわたって死の危険に直面したほか、六年間の獄中生活、六年半の自宅軟禁、三年間の亡命生活を強いられた。一九九七年二月に四回目の挑戦で大統領に当選し、二〇〇〇年には平壤で金正日との南北首脳会談を実現させた。

金大中著『金大中自伝―わが人生、わが道』千早書房（二〇〇〇年）は、青年実業家時代、政治家時代、青年期における家族関係や故郷の話など、金大中の生き方についての素朴な記録をつづっている。金玉斗著『政権交代―韓国大統領金大中が闘い抜いた謀略戦』（悠飛社 一九九九年）は金大中大統領誕生の舞台裏を描いた。

#### 盧武鉉（第十六代大統領）

盧武鉉は一九四六年に慶尚南道金海市の貧しい農家の三男、二女の末っ子として生まれた。高校卒業後、魚網会社に就職するが、すぐに退職し、法曹界の道を目指した。一九八八年に第一三代国会議員となり、二〇〇二年二月には、劣勢を逆転して大統領に当選した。二〇〇七年一〇月には平壤を訪問し金正日と首脳会談を行った。大統領退任後、不正資金に家族が関与した嫌疑が明るみになり、二〇〇九年五月二三日に自ら命を絶った。

盧武鉉編著『韓国の希望 盧武鉉の夢』（現代書館 二〇〇三年）は、盧武鉉へのインタビュー、息子や支援者による盧武鉉の紹介、そして盧武鉉自身の手記をまとめたものである。盧武鉉は自分の人生を「シジフォスの神話」に例えている。「成功と失敗はいつも表裏一体であり、いつも喜びよりは痛みを感じた。大きな山を越えると、より高くて険しい峰が私の行く手をふさいでいた」と心情を述べている。盧武鉉著『私は韓国を変える』（朝日新聞社 二〇〇三年）は、海洋水産大臣を務めた八カ月間に経験したリーダーシップに関する考えをまとめたものである。組織を統率するためには愛情と情熱が何よりも重要であり、お互いの喜怒哀楽、希望と絶望を分かち合う、これが盧武鉉のリーダーシップに関する基本的な考え方であるという。

（にかい）ひろゆき／アジア経済研究所図書館